山路乃露

五十五

此山路の名のみかきに後の人代々添へ
加ゆるの方将深みの君なあひかはすもとた
てし来るべしとかれとて来るのせらるゆり
なくて
今く司さるべし

山路の雨の　同歩上
けれ　　口中の雲
引なり　　口下の雲
此六帖と　五十四帖と合　六十帖之
此六帖は後代にある事之

九曜文庫

[illegible]

慧サ丞戈の冬までのるこ
これはかれ光源氏の此来(すき)れ、かほるだねとこきこし
れあるりのことなれば、それつゞきめいたることそいと
かたはらいたうつゝましかれど、ゆめくさまは侍らず。
たゞかれをれて星べに、たづねあひたりしありさ夜。
こゝろなるこの此々し紀くもしうこける人の、ゆめれ
やうなる此中の衣(あれ)に悪びがたくおぼしなるまゝに、なる
とれく筆のすきこに書をさ侍る。それ人心にもさこそ
人にはもらさじ里けんとかりそめなる振(こび)の事にて。
ぬしさへもられく女にかれば、おぼしなる人のそれ引来紙
とふらんとて、もしほ菓かさあつめける。そゞろごとゞ
もこれえり出て、きやうのかこにすをけるつゐでに。

これをこうけ、なまのきく所あるふしもなけ秋
どももていかるらんとさひわたる人のり来ぬけな
とこうぢりのぎめておりしさまのうしをさけるま
やあらんかれ（浮舟ノ事）ちかれかりしかげろふのり来ほのうま
（葉ノ）きくつけぬてし後ハいかるりしことぞとれ心かり
うらぬおりなくてありしせうと（浮舟ノ弟小忘ニ）れまらをバ（その後）も
たびくつかしきさ、されどたゞおなじさ夜まうねく
しくてのこゝへりまいれバ（葉ん）中くれ心のこゝぶれまて
（むし）音いまさ夜ぐりさつられ常しつゞくるまいと抽衣や
（大忘ノ事）こおほい表をなれめなるずかくさひ志めきこゝて
おりく思ぐこうなりりしをさるとも人もうち

ゆるひぬふひまありなんとのどかなまちわたりし
まおへなくこなし罪てしかるしさは世をうへて
も思ぐこきなぐさめまに人の出まるなん、かうれかふり
ぐまえまほしさまいうじうおもひよそへられて（浮を大忘ニ）
なつしかりしかたちまさ夜たゞそれかとこゝゆか
おりくのありしなどいと恋しう常しまるまも
なぞおやしれ心やいましもなどくるしきまで常西
らんと我心なぐらあやまくまさひ志られぬふさ夜かう
ざ夜まさしきげひれど我いかるまかひたすらなき
まなしつる年月ハいふかひなさかたまてさてもあら
れつるをかくこゝつけてハ夢かうつゝかとも罪ありを

ざらんハいとむねいたう心まかるものへバこづから思て
をハきんこと紙おぼせ。かゝる内のれもれいこゝあらく日
まて。ありぬふとていとこさらるまさうぞきて。女(女二)宮
のれ方まつ(慧ノ)たりぬへれバ。ちぎれれぞ。ほをんいろ乃
こうちきなど。な夜めりしうきなしぬて。そひふし
ぬへるれさ夜いとめでたうれぐしれまゝふすぢなく。
なびさかりたるもそれそぎめなど。うつくしうこえ
ぬふまもかれもられかりし人(ほ)ハけぢくあいぎやうのき
たるかたハまさりてさへせひおられぬふかゝなどさりま
うつくしかりしもそぎやつしつゝんさ夜よなど。ふぐ生
れハこれのこ心まかりぬへバ我ながらうしとせひしかたハ

いかまぬまかんとあやしかれバもとよりあさくハあらざ
ましれせひのせもずなりし一ふしまそていかまぞや
心をさぬべうせひなり給しがおやなくさしうを夜
ひしあまれハなれめませひさましがたこさ紙ざす
がさ夜ぐまつけて。人をこぬふまもむかしよりせひ
せこまし心の孫ぢけがましさまや。ひとのゆりのこ
ありがたくおぼしぬふ。宮のうへ(中宮)ハれさ夜ことなる
むつびまてかれもこれめかりしぬへれだ。さし月のそ
ふまくまかたこまをもくせくなりまさりぬへれだ。
されこむかしがたりまあふしぬふことハおもしぞ
かりぶるあらずけぶやかなりいとゞなぐさむかた

やめいてひきかくし泪ぐまれ給いまはもじめつ
これやうにされこもむしてぼれ給ぶずすぎにし
ゆめれうきもしなどの風にこえもてく衣のう
られ玉あらはれんのこすぐしうおぼしめふにも
今もこ里のしるべともせひしられ給秋かく成り
まゝに風のをと月のひかりにもいとゞしく衣そひつゝ
ながき夜はさらでゞこに孫兒がちなる紙まして柴
の戸たくあらしのをとつま恋にたゝる志かれねに
ゆめ紙むすぼんかたぶぬにあさまゝにさしてがしき出
めふとおぼかる中にもあさ夕いでゝ人なこくにも
としめへりしおやにもそのひなう地をのこあけく

れおもはせ罪してをのづら心もぬべかりしきざ
こましもおとちれくなりましにいつにせひめひ
かんとれつきせずなりしうおぼ母かくてこそあり
かれと風のつてにもきれてまつらんいとあさ
ましうなるべうしし人にさへのうりなくきれ
こそまつりぬるをきめて身のうされあふべきなら
んといと口おしうさらばながらりける命のしるしに
母君にいま一度あひこまほしうおぼしながら程此
山道にくるれつるひにもさし出こえんことはつくまし
うてことつてやらんことれ柴も見えぬむしてぼれ
てのこしてぐし給さるはもじめよりけ子はこと乃心

しりさめるをおどろ母君にはきこしざらんなどお
やしうおぼつかなし大(兼)ねの君日比すこしまげしひ
給けるを母(女三)宮などぞ常しさはぎて、いとゞ抱さはがし
かりけるまぎれにかしこ(小型ノ名)れことも御つかなくて、日比
に成ぬ、弟(よろづ)こちらきれいのりの志るしにや、ことなるす
なくてとゝらりぬれど、れなぐりなやましき
さ夜にことつけぬて、いづくにもれありきなどいふ給ハ
ぞ、のどやかなるひるつゝ我(兼ノ)れかくにはながめふしぬへる
に、此ゆかりの(小君)ましハ弟れり、(兼)ちくめしよをてなやま(訶)
しうしつる程ハ、人めしげうむつかしうて、此も来しき
られバいといぶを紀にもふぐい夜これよりすぐにゆ

けに此度ぐにもうねくしくてへりきなバいと
しういふかひなかんとて、此文給ハり、(小君)ゝ夜うちもや
めていそぎなれども、日ふけて出たりなれバ、山かげ
くらうなる程にぞもつきぬるかし(小型)こには、例のまゝ紀
なくなるなるがめぬふ程なるに、おなるよりも人き
ておまぎにかくなどさくめ紀事ゆれば、(尼君ハ)せひかけ
ぬ程にもとおどろきぬて、(訶)れうづらしきてしぬへこと
くしかるべき人にもせませざめるをされミいたし
もなち罪しぬて、いかに抱しとおぼしたんと、いと
をしがりて、おきましうしろめにおるぬ、これなきなり
やと、ロぐにいふも、(浮ハ)いとくるしと笑しかり、(尼君)まことにハ

間のこゝろにといはせられば（小兵）おゆゑ出て、すのこの
もしつるについねたり、尼（尼兵詞）ぎいざり出て、扉（尼兵詞）くりう山
ゐるけぬふれ志ましなくてやと、ふりめしさゝし
すぎ心、とりぐくたしいたくおもひきこえ侍、いか
ちるまゝ、これにもこえ志られ給ひんこと紙、まづらへ
しうおぼしゝめれば、こゝてまつりまづらひ侍りと
のゝへば、（小兵詞）けしびさぶりちるりれ、かへりなくても、かへり
まいりまじうちん、うけゝ海りつりといふ様
も、いとらうゝげなり、おまぎまめやかにきこえ
志ゝまて、（浮ノ）志どけなげなりを、ひきなをしなど
志給ち（浮ん）紙いとつくましられど、紙心にもげり

りうまでこゝぶ給程にて、いつゐまゝくれなくて、女
君などこゝ給なげ、紙にかぢりへぶてかりとせひ給
ひんも、いとくるしきに、さるゝんさ紀に御のめして
ぢやとせふおりくあれば、こゝ紙にもあらでゐゐへり、
（小兵を）ぢらが寝にもとて、サねのあまたびき入て、へぐも
まべりかれぬれば、（小兵ん）いとうれしうて、まづれ文さしをき
てこゝさしも、いとさぶやかにおりしげなりさ海、雪か
しなげれおもげ、家ぢりこゝぬ抱かゝれぐし
などのおりしにもあらぬをこゝに、ゆめかなりし
ぞとかなしくて、よくとなきねたり、（浮ん）姫君も打まれ
つゝ雪りしのことぞ、今更見し出られて、まづ女君

のむ米とはまほしかれど、うちおぼべき云の柴も
おぼしぞ、とづりゝめゝひまて、板も世にあるを物せ
ありましを、誰(れ)もくさゝそハ志給ひめ、をめてうき身
の歎(ちきり)にや、志ひのかにあるがゝへて、おゝぬ世の心ちし
てこそおしくしつれ、をのづゝ心ちも志づまるに
そへて、まづ母君のれことあるん、おぼつゝあうゝあしさと
のまひもやゝぬに、いと(小君ん)かゝしくて、おりし(訂浮ノ)まさず女
にし後ハそれ(浮ノ母)れ頼(ちげき)に心もとゞひ、おやうくこゝ給し
を、大(蓋)将殿より、さ夜ぐあるぐさめまて、まろあどまで
もいとおしうをさせ給れ、心ざしのゝゝじけあさゝり
あぐさめて、かけとゞめゝりとこそつれにの給めし。

されど、れぼけて、おりし人にもあらずぞ思えまふ。
かうきゝそまつりしおりやがてもこゝえまほし
う思ししを、大(蓋)将殿志ざしハ人にもすると、夜ゝの
給しかバ、えきそし侍ぬあど、おされげにいひぬゝり。
それ(浮訂)あんいと口おしきかけてもしられなしじと
志ふ紙、いかにして、男給けるにかと心うきにおらざるも
けるさ夜にも男しなしてよとのまへバ、いと(小君ん)かゝしと
志へり、ふぐ(浮訂)うくう紀さ夜にても、母君にいま一ゝびあ
ひきそまつゝんと志ふ、これを思びてつゝへてよ
とて、本丁のそばより文をとり出てさしをきまへバ、
ふ(小君)ところにひき入て、おりつゝ(訂)夜あるくてハいかにの

ぢうあはれ志げなるを何ぞすなるんと志ふ程も
なく火もえ出て焼(なり)もうちくゝり此ちやうのま
りとこゝて いとをかれバあさましくて おくゝる
こゝ也こゝるよとのゐまさふふ地ぢもいまぞこゝけ
かてけれどつゝいそぎあけこゝるよ(小志詞)なぐこハさこれ
こゝるといへバ此(とのゐ詞)地いこなりけるを見し思れてよハかる
なんかゝめこれ侍りつといふ されどまかひなし さふ
らひ夏やかるをのこぜこれおさ出て ゆく志くとく
乗りぬへる地かれといふもいと(小志ん)おしとゝへり此(他)度ち
しとゝまくつけて乗りぬふんごのむまゝる風のを
と志げうさまゝ侍こちこゝり火もえまさりておやし

かりかれどもよハかるあらぬ人風吹きをひて此度
とバよけこれバなどのくめづらかるこゝとのなて ゐる
へハまゝで始などもいこゝじかりつれども程なく
もえとまりて世中志げまりて これまゝでちゆ
などして名ごりなく志めやかるゝ(恵)ハあけり
元のおしこさまゝ口ゝ愛まこゝち出てこゝぬふとて かれ
見しハ石(めし)よをこゝり御(よべ)アハふくゝまでこそ侍しが いけ
程ま地しつゝぞとのゐへバ(小志詞)ありつゝまぐれまゝいり
つゝとこゝ也(恵詞)いつゝまぞれいのおなじいぶきなる
んとぞふこそかひなけれとのゐふまも(小志ん)さしも
あらぬさ風まさ(ほノ)こゝえなしてよとて まことよう

しとさひぬへりつる人のれおもなげ衣に心ぐるしう
心出しられて志ぞしためらるれば つねにかくれな
かんもれゆへにとたぶひてはあしかりなんとさて
つるさ夜こ夜かに男也 日比(慧心)もさぞどうしかにさく給し
ことなれど れうつとは さひ給ぬにげにとさておもは
すらんめづらかにあさ夜さうおぼしぬ夜にさへ
なり給にかれば さ人ともなくおもがたりしてと申せば
うとましげにや 此給しとひぬへるに ぞ(小忘詞)ありし
ながらなどいふまくに泪のおつるをまぎらはして
けぶしうるさ いと(慧ノ)衣にこ給さて(詞)それつゝへらとあるら
ん文いとのぬへば 死(小忘)出たり おぼしなびきかみいと

さぐやかにさしまれたるうはべよりもおやしうもれ
あれやまして地の心ゆかしかれば おけて給とて
よりぬ(詞)人のあらむやうにもあるかれ 我ながらなど
くたけしかんとほゝゑまぬて ぞぐありしながら
のもなれば筆のけがたもまゝひける程しるく
こえて すこつさかれぐにて
いとひつとてし命のさえやうでふたゝび
おなじうさせまぞふる
まゝらせし心のやこをしふにもまゝとれた
しいまだうれしきとある紙(慧ノ)こぬふにぐ(ふ)うじう
なるし(地)とぞうりたあらひぬへるれ袖の雫(しづく)ところ

きさまでなん。ほのぐとあけり。里のひかるまに。
いふかしなうきこゝろまて。ものの紙ふくあれと
ふゆへるれかしき。いうじうな夜めしくこしゆふ
をこれ子(小忘ん)もいとめでこゝしとうちまもりきこえ
つゝ。かぐらりおぼしこゝろあるに。(浮ノ)かひなきさ夜になり
ゆへる紙おしうあこしとこゝへり。(蓋詞)な紙こゝぐし
こゝふやうなんあるいまけふあすもぞて。つゝへさ
もべきとのこゝまひてもゆへり。いとかろぐし
さやうなりともこゝよひこのびてものをんとこゝふ
をその心まうけして。夕川なるまいれとのゆへ
ぞ。(小忘ん)いかなおぼ(浮ノ)さんとくるしかれどさもえきこえ

させぞ。うけ三夜ありていでぬ。(地)かれぬれば。(蓋ノ)いうじ
うまびやけしこゝろ女車のさ夜にておりすべし。
山ゐまなりてぞ。れ馬まはのりうつり給ひ。夕ぎり
こちこめて。みちいとゆどくしかれども。ふるき
こゝろとこゝろべきて。いそぎ口ゝりゆふも。川はあ
やしくいまはそのかひあるまじき紙とおぼを
ども。ゆるし世れ。夏がくりをぐるまかゝるあれ給
まはしう。ひさ紀いそがるゝれ心ちまなん。うきく
もこゝふよものあらしは。月なぐりなうすゝ見
のぞりて。千里のかりまでおもひやらるゝ心ち
すゝりいとゞおぼしのこすことあらじかし。

山ふくなるまくまゝにおいとしげうつゆゆけき
ぢれどいぢんいとやつしこれど、さすがまつきぐ
しくれされの家もらふさ夜もおしくこゝゆか
しこは山のふもとまいとさゞやかなる所なり
なり、まづかれ見らも低いれて、おなじこゝまへだ。
こゝなるの門こゝろもさして侍る先り、こけのか
きかしきしこゝろ所まかふこゝろ志侍るめり。
こゞいらせまへ、人かげもし侍らぜとさしゆれだ。
志げしをとなくてをとのなて、我ひとり入ゆふこし
ぢといふ物もかなくしなしこゝろも、おなじ
ことなれど、いとなつしくらし所ろ夜なり、つまども

あきて、いまぶ人のをきこゝろまやとこゆれば、志げ
里こゝろせんざいのもとよりつゝひよりて、軒ちかき
ときもまぶの所をくひろごりこゝろ下まこゝちかへれ
家こゆへば、こゝなるは佛の山前なるべし。こゝやう
がうのかいとしこゝふくかわり出て、こゝごこのもし
つゝこゝをこなふ人あるまや、經のまきかへさるゝ
をとも志のびやうまなつしくきこゝて、志めぐ
とも此表なるまおまとなくやがて山洞すむ心
ちして、法くぐとこゝねゆへるまとぢらりありて。
をこなひきてぬるまや、いこうじの月のひかりやと。
ひとりごちてぞぶれのつますうしあけけり。

月のかかをはくぐとながめこうかこそしら先
音ながらのおもかげふと覚しまれて、いうじうあ
はれなるまゝぬへば月ハのかりなくさし入るに
まび女かうぞめなどまや、袖ばなつしうこそて、ひ
さいがこのゆらくとそぞかけられこうまゝこのまゝ
まいうじうな夜めしうおかしげまて、かゝるしも
こそらうこげさまさりて、悪びがこうまもりぬぬへ
浮まゝ、な紙とばかりまゝながめ入る
浮さとワぬ雲ねの月のかけのこやこしまゝ乃
秋まかもしざるしん、と志のびやかりひこり
ごちて、なこぶぐこうこうさ夜、いこじうあれ

なるまゝ、まめぐもされこハえ志づめ給ひずやあるをかん
ふるの月ハ泪まうきくれてそのよなすがらの
かげハこぶりき、とてふとよりぬへるまゝ、いとおぼし
なくだけ袖などいふらん袖まこそともむくつけく
て、おくざ夜まひき入なふ、袖をひきよせ給まくる
せ紙とめぐこきれかしさをさすがそれとこ志られなふ
ハいとも(浮ふ)づしうロおしく覚して、ひこすしむくつけ
き袖ならばいかばハちん世まある袖ともきられなりぬる
をこそハうきことまふひつ、いつであらざりかり
とこさゝな紙されこてまつらんとさ夜かうざ夜ま
あらまされつるをのがれがこくこあらハされなり

ぬるとせんかたなくて泪のこちがれ出つ我にも
あらぬさ夜いと哀也。うさ(慧心)もつらさもいづくをたづ
めとかたりつくし給へん。ふぐ(泪)あへなくさくなしつる心
の内ハ中々いふべきかたなりしを。ほどへて復り。
あやまつさき夜まさへきくことありしにいとゞ心を
こゞれまさりて。ぬぐめなき世のことゆゑ出なし
志我一かたの歎(なげき)ばかりにて。おしこれ毎夕の雲とも
ながめしハよそふるかたのなぐりもありしに。
今一し泪の心そへて。さしまなぐふまじき心ちな
んせしを。又夏のやうなることをまゐぶ人志あり
し後ハいかでさることあらんと。とき夜かうぶ夜に。

夏より夏ままどひつゝ。おひするおりありなんやと
のこゝなげきすぐしつる心のうち我かたしを
いかで覚しましぞしん。心ひかねあくがれ出る山
居の家けさ我。佛神もあはれこゝ給けるにや。思
のほかにかぢりをこさてしぬるは。かひなきい乃
ちのなかへけるを。いまなんうれしきなど。を
へてまゐぶべくもあらずの給つゞくるに。さ(ほん)涙が
哀とこさくなふしもあれど。いひ出んかたなくて。
しゞうちなきぬへるさ夜。おほとかたらうしげや。
さ(慧泪)るやいとかくおぼしもてこゝなんいふ
きぞしより志ひ志りし身なれどもふる

さ心の多いかうしきと人をあらざるけると我の
こおもひしらるにおこるうしこそふるや
あらんとの給ようなりしぢのことしてこしか
すめぬふ紙（浮ん）ぞくがいうじうちづしうて いと
どいふべきことの紫もおぼし孫どもおまりおぼ
門かあるんもおやしかりぬべかれば
（浮）なぐんてあるまとあらぬうつくせばこそれまく
の夏になりてよ河のうまぎらしうも（芸ム）音よかを
らずなつし前おもひしりうるしるやありし
よりもとてなしようい心よくねびまさりまうる
心ちしてむしの人（大）をもれようおぼしうるれと

こぬふよいとぐしきれ心うちなりかしまうしかる
のまよひぐるくやしさ紙かけて後もしぬて
ゆめまなるんことこそあるまじかれとて
（芸）さひ出てしふぐるこそなしかれまるやうか
ゑし夏になすべきげ（地）いと心ふくおぼし入
てなしのぐひまぐさりしぬへるれさ海をすうし
抱せひしらん人をおもれこすぐすやうをあらじ
しかれ（芸）れ心をうむしよかもしぬなつしされ
悪びがうおもれなるまと我（浮ん）ならざらん人を
いとかうしと僧都のいさめまもまぐかしじかしと
おぼしつぐれど（芸ノ）うちへぐまいり給ひず さ海よく

りけるはことだまにやつり給てしことこそ今更口に
しかれなどいひて、そなるこのとをりれはかうしほそ
めてのぞきけまが、つまどれこすひきておもす
めり、さしぬきれすそぞりほのうまこゆるを、いこじ
うえんなるれさ夜かれ、いまやうの人はかうしもあしぬ
物をさやまゆきはかしきこそなどめでまどゆも心
づきなし、吹きぐるれをい風などはましてうこそ
此世のかかの心ちこそきれ、仏のといゆへるもんごん
のかほりも、今こそさやしるれなど心もそこまて、物を
すがしかうしれもとに悪くずこつ、いまぶそのまく
にてこそおりすべかめれ、おきましきは文のゆるさな

アやなど、はぐさくめくもかしかしぬさやまゆ心なる里
りしやうく明がたちうきこちすれば、悲給なんと
て、いとかう心ゆるぎおぼしむきぼれこそこうき
男のとがにさなせどもれうれこそれむりしよりく
なりこますこまし心なれば、いましもあれそひ
て、さ夜ことなるむつびまでもおぼつるるぬ程にき
こしまほさきにがりしせだなれこぬ所にこう川ろは
をきこえん、笑りしの山里は、宮のおりきし世よりも
あれにさしをうりし後はちとの名をさへりて
ちてこそありしよりけにあしきてましがさて
もはしつきのそぞろ心づくしなることまぶ男にき

られざりつゝ秋ふかきつゆまさはれんそでよいか
がおぼしまけんとて
慧やれ山路の家にそほちきて又まけかへるあか
月の袖どうわへゆへる衣さもなる紙ざりなるんや
浮 家ふかき山路をまけぬ人ぶまも秋ハなるひの袖
ぞさはるゝ慧詞さりやあさはかまもの給なすかれ まめや
かに罪させん此返など今ハおぼつかなうなどもて
なしゆふなうてあらんなど返しの給てだしこなる
かゝぬ程にいそぎ出給いたくやはしこゝかりの此よそ
ひもいとゞうな夜めしくおかしげまて家けさ本村
をまけ出給此さ夜ハさすが衣とゝゆゝんかしつとめてハ

人ぐ仏の此まへのうちとけざ夜いかなりけんと いい
まさしめぐりて慧よりねゆへりし所のうつりがなどを
めでけもぎつゝ袖ふれし故ぞ夜あしゆゝ
ひにとそさしゝかほりにかれなどうこそことくさく
いひあへるもな夜にくれどこやこの人ぶまな紙
いとつきをずめづらかなることにめできゝゆゝ此さ夜
なれバましてなにぞりのこともなきむこの中将
とのゝ山ざとのひかりにさあへるころどもにハお
どろおどろさくめで罪ゆるもことりなるかこもを
かし姫浮君ハなにとなくつましき心ちしていとゞさ
やうにのゝまぎらかしてねゆへるにいつしか此文を

例のところにもこれ見えば尾張いとまかくしこされ
さ海かれとて、ひきとさてこせきこそ給ひなぐの
かしかしすくよかなりて
恋 こちらへり私こそまどへなげき夜の夢をうつて
まさ海しかねつ、けさは(文字)いとゞ心もほれまさ里侍る
こゞ罪しさせんかゝなくなん、今ハまのゝ衣をことに
見しきるべきれさ海に、れつきをぬれそしきこそ、中
中心ぞこよかしずと、うちつけにれ返さこえんも、れ
いとつましうて、見しもかけぬを、おまゞ君いと思ぐ
まちまされことになん、かゞりまめやかなるさ海にこさ
こし給めるにかへりてすきぐしきやうにもなげしな

むなど、いとくことゝりをいひきこせられて、うちな
きつゝ、此れ文のかゝりて
そのまゝに又紙玉の方にそりで夢かうつゝ
うれぐるをぞいとことなしひにうきてなりつゝ、まち
ちこのふ心にはあまれにのゝなげしつゝさ海かそ
まにこれがとて、打つけにことさしめきこゝろかゝ乃
文しこゝろもいかにぞやことれさ海にこゞひこゝん、又
ことひこんなかうしやうのなにぞなんもいまは
めにつかぬかゝありなんをおもとなきさ海にかき
まざらりしこゝろ程、かやうのつまぐの心ぞせハ昔もけ
しうハあらずこしをなどそしそり、此後ハありし

文をつゝ(浮舟)付とて、よろこびにたへぬ事もてさはがん程、
人もあまたきてあるんとせかれてうしかれと思
ふかれ右近といひしハ、おぢうなども程なくきさい
の事に乗りてがれば、れなげきほれつ、おやしき所に
うくろへてあけるをきゝぬて、衣と見しつ、心ざ海など
もおとれくしくよろしもれなとこゝをきゝぬひ
かれば、志のびてまいるべくの給はせて、きぬなど
けうしこれば、いうこ(左を)ぢうよろこびてまいりかゝ
を、もてなしありさ海、もとこゝるもまじらひなれ
こゝ人ぐにもこゝよなりしねぐ、志(慧)もめやしし
とおぼしかり、かれ(地)夕がかの右近ハかゝりをくもと

の給しれさしいゝへぐにも心もとなげなりしを、見ハ
いとつやかにてよくかしぬさ海してさやうのこゝもつ
きあるらずぞあめる、それ(慧)にも此義のやうなること紙
だかしきをもこうせ給はざりけるを、人しげかしぬ
程なれば、いまぞめしよをて、まかなしねどの給出
こゝにきく人(左を)の心ちあるまくかハ海と人ん、志あきれ
こゝさ海いとことちりなり、紙(慧行)もれいかなりしことゝ
も心えがたくおぼゆるにじめはこゝひこすし、おしまき
志き水の音にのミうこちしを、おやしきさ海にて
こつけきこしこりけるへハ、こゝによりしぬこゝまや
うのもれてしまぎあるんも後もうちこゝて久し

くちやミ給けるなどいふなれば、年へたる所にさもあり
なんとしふ紙、これ（ほゞ）も君の許へのせうそこまは我と
せといとひ給ひるが、心のかうまさすしふるさ海まこゝ也
れば、いかなりけることまゝと心えがたきれも此乃あ
まさ海こけん人こそいかまもしあひすらるあるべ
それとのみへばたしめより罪しさせしやうまゝこゝあ
さゆふねをのこちきなて、いこゞう柏を覚しつゝ
ら海くもおきねなてハ後の世のつこうろこめべき
をこちひを志なて、いかき海にして身をうしかりん
とちきへ給ありく給しおとちなくこちしき
こしてし後にこゝうるがひなくれのそこ可

入なてぞりとこそハ今までもしひ罪し給りつれ
これくるん志也まうさつけなへりしことなどを
いまはと世紙おぼしなりまけるとなんこし給
をいかなりけるれことまゝといひて、いこゞうなく
（ほゞ母を云へ 恙詞）
けくも山にいかましひまどりん、おまり心をさめ
ざしん程いと柏さはがしうしん、此子（小宏）にいとあふ
なりしぬさ海志くれど、なる紙もろもなをゆさて
ことれやうくもしくいひちらすまじう、うち
がこめてぞよろべきひとりふたりとしふぐま世
まおることにいかくれなげなる紙おまくへもりなし、
白
こやなどこゝつけなて、ことにもいでこさなは

いまいとゞこゞこめもよしあるべきことをと
のあふやうでうる夜ひきゝ入させつゝいそぎのり
て出れど此かどすうしやすすぐる程にをし
とゞめて（泪）おりてうくあんときこえしめへといへば
入（小意）てさあんといふに（浮母泪）あるにうことくしき人め
いてあるひし給こゞこあるへといへば（左を）うち
とけこゝろへ入ぬ。玉のうてあれめうけし。
いとゞ志れぐしうらぬこゝちもて（ひちうこ）もこゝに
ぬこゝろ程ありなり。忘（浮母泪）けぬ程にはいかなしておりし
こゝろにこゝろこゝびにこゝろよげにあり。まさり給もの
れ（意）出ぬ愛よろづにかく此ゆりをおぼしうずまん

あへる此心ざしをこゝろてまわりにつけてもおりをま
しかば。ぢうかゝに心のどかなてとそこ罪ましを
と。忘ふにつきまずかるしさとてうちなけば（ひち泪）うこを
此度の此へりこれよろづにかゝしけちさ。月志
ほどにもすぎこゝろ此ぞんぐこをよろこびにぬふる
心ふかけれど。きこえさせんにつけてもそれにも
ぬひつゝまれてまりすぎ侍るびんぎにはよさ
さ夜にけいしぬへこれもこゝろ（大）こ此君の此ゆりに
をめての此ぬさけかけさせぬふとこゝろてまつれば
うぢうりその此ひうりにあるうべしとやこゝろこゝて
しとかこゝしけるく侍る。ましておもせましかば。

いうまと口おしくあんなもひゐへうるゝ。ちゐ愛ま
つうまつりゐへるれ法ばほまでもありし人と
をおぼしぞいとこそやんごとなけれなど。いひち
らしてこゝろめり。毋(ほ)若(ぢ)うこのうくいへばおされうげま
でもおもぶこしくさふべし。ありつる人ごもとうく
けうれなどしてぞこしきめやうまなりゐるりぢ
くゐよりて。悪(訶)てきこしさすべきこと給りて。まいり
ゐるといふる。何事(ほ毎訶)ならんと問ひ給ふまへぞ。ま
づうれ抱ひ給ひをいさめこさこしさきんとてゐん。
こ成うなるれことの心いぱこ忘こそこさこし給いめと
いへいでや(ほ毎訶)あこのいふんことはむかぐしらぐと

いまれてうち(ちを)ほゝゑこうて。ぜこがましとさへるそしさ
まてれ文とり出てこそまつれば。おや(ほ毎ん)しとていそぎあ
けられどもうけるへ人のさひよるべきことまあら
ねば。しぶし心もえずまほりゐるるまうもらぬ筆
の論をこもてけまゝまさすがそれとこなしゐる
心ち。中ゝなるこゝとへんこはいかなることまうと
こゝれかしゐれば。さつ(ちをん)ことゝうなしてかく(訶)おぼ
しまどいん程ま人もあまるこさこそもあしうなる
なん。さりげなくさしげめゐへとこさこしさすべく乃(慧)
給りをつれば。くまいり給りつるなどさ面ぐこし
らへられて。ぐ(ほ毎ん)げり心まどひをしげめておさあが

里つ。さてもこれはゆめかなるまぞとあされまどん
御さ殿いとことゝりや。ちじめよりのことゞも。おされ
それどもいふかひなからずかたりなきば。いこじう
なるしうて。さし法どひつゝをさかねたり。まゝ世
まこそおいすなれいまはいかでかゝる時のまともしてぐ
さず。ミ笠らんと。もこゝろゞれ給もことゝりやされども
ちかさ程まも侍らざなり。いづくとなくてまいかな
をいかられさせ給なば。ひたちもさぶめて。聞ひさこて
給へんずらん。かふあまを覚しのどめて。例のもつをまう
でなどつかりなしなて。おさてゞりまおりしまさな
んはよるべきといへば。心(浮母)まもあらず打うなづきながら。

今はそのほどの心もとなさ代がいかゞすべからんとて。
なみだのミふりおつかさ殿いとおしげや。よからぬなま
ごぶちはまかなられとかしきゝかれど。いかな
してか此すぢといはしよらん。ただいつとなさいやめ
さなれば。大将殿のおぼしたる殿の物代などまいとゞ
しくこり返しはまどひぬふまおしくもしべし。う
らんはさしばかしこのはともまかなしずしたひきこ
えさきん。とつらかさせ給なば。いとなん口おしかるべき
と。返く契(ちぎりとき)無て。来りぬれば。いひて(浮ノ母)なぐさむべきともぶま
なきまゝに。此子(小忘)をのミまつりして。(浮ノ母詞)れ覚しかんさ殿
らしくかこれ。大将殿をいかゞおぼしたるとさへ

ぞ。まろはかれ殿（慧）のあるまゝ此の給ことぞまゐければ。
ましてさづり抱きしうちなん。まぐこゝそまろら
ざりつれ袖もひさまるるず。いとじうなり給しこそ。
めもあやまるしがれまへのつしよろびぬふまはれ
なかなまきりて忘きしゆりなどおされきこうろまま
うきていへばさて（浮舟）くとけすがに打忍まれながら。そ
れに浮けてもひなさ海になり給にけりを。むね
いたく口おしとおぼゆ。さしすぐ志ろめれとも。なげ
きまゝへぞやまひづきて。道にし長の此ちうなく
なりましを。今志ばしながらへましかぞと。衣に忘
いづ。右をがいひしましに。初瀬まうでのよし。へぐに

もいひきりきて。よひよりうこんをばよぶきて。おか
月はまぐよをこめていそぎ出りかしこまては。例のしろ
べの見（小雲）しはをまろ入て。かくときゝ也れば。心（浮舟）さもぞこも
きんなるなくて。まづうちなれ給。おまぎゝかひぐ
志さほんぞやうまて。さるべき所とりくひきけく
ろひなどして入ぬへり。娘（浮）ぞまもかひなき墨（すみ）ぞめ
なれどおぼやかなりれぞまとてまつりかへさせ。
いとう（尼宏詞）とて二海うきは袖の名かれ。まして今いか
りしうつけきうし給てん。人の此心のうちさひやう
よそいうじかれとて。打なき給。けに（浮舟）いかぞうりと
志ふまもしなくて。え出や里給りぬを。おまり（尼宏詞）

心づさなるさやうまや人を出給ちんとせいし
なれば中(浮)のさうしドロ事そへていぎり出
ゆへり母君うちこうより心まどひして猶もおぼ
えねばこゝじむをへるだりなりいく程のさし月も
へぶくられどありしまもあらずおとろへてさしも
きよげまふとりきこうし人のおもがちりまとる
まで姫まけるせこゆふ姫(浮)君の心のうちこゝに我
ゆへなるんうしとつこえがましく[illegible]しられて
いらじうなれ給うこんもよそにてしやりきて
つゝなしさは猶の数(ぎ)なるぞこそまつるまめもくれ
てこゝにてハ今一しか洞におぼ進ぬるり いと久

しくなりぬれどこゝがひにうち出給ことの案を
なし母君からうしてこゝめらひつゝいまゝで(浮毎詞)かくあり
にもあらぬさ夜ながらもながらへ侍るハふしぎに
てなんそのまゝに命こえなましかばかふハいでゝ見
なんされバいかて風のつてにもかくこそはとおぼめる
し給ハざりけることれつゝうかなしきに今ぞにかゝる
ぬ出すぐこゝなるがなぐさゝなんかくかひなき出
さ夜に姫給にそれバいとゞ心ちもまどひたることく
いひつゞけてふしまろびぬへるゝとりにせきぞ和なく
くこゝ(浮ん)洞にのこむをびていゝへもし給ひずえ(浮毎詞)
じめよりのことおりさ夜くりしくさう夜洞しきと

きこしこれば、げに（尾志詞）いまはせろかなしぬさじめ
こそとて、おるじのあまぎ、こいめしまへりまれ（浮母）
べまづうちなきつ、さて（詞）もいかりしてゆらんじ
つけさせまへるまかぢられ、ささ庵にておちあぶ
べりけるをかくさりとじめさせまふれなさけは此世
一ゑなるぞ、きこしえさせんかゑなくさまへるなど
いへば、そじ（尾志詞）めよりのこと、まかなられどかゑり出て、
四五月までは、うちもへうけしべざ庵にもこゝ給はざり
しかば、なほ紙かひあるまじきなめるもれゆへ、めのま
へなるなげきをやらもへんと、さこまへなげき
て、さ庵ぐねんじ罪しきるしまやかくこゝそまつ

ぶ、仏神のれきるしと悦（よろび）給つ、おけられのつれ
づれなぐさめに、こゝそまつりあつかひながら、いげ
くまいかなりけるれり来なりといふことは、かのうま
も心し給らず、おりくおげしへぞそこゝそなど
きこゝゆるまも、ゑるしと、ゑしこめれば、さおそもと
ひこそまつること給らで、かばかりめでこゝ紀れさ庵
なれば、こゝ人にそは抱し給はじと、ほづらはしく
さまへしもきるく、郡れきこゝそさせ給めれば、かひ
なる紀れさ庵も、つきをぞさまへ顔（あげき）もべるなすぐ乃
給ま、いとぐうちなきて、おちすじ（詞）こぐひなる人あ
まる給れど、これはさ庵ことに、おさなくよりこゝも

づゝ人なくて、おさ夕ハいかで人なこくまも、こゝな
してしがれと志侍しかひなく、打すてゝからをぐ
まとゞめずなり給しかバいかでかまられもめれまへ
なりこそ世の常(つね)のなるひまて侍り、おぼつかなきをそへ
て、志なげき侍し心の内、こゝぞしもらせ申へさゞり
の心ざしをしらぬがかゝ、おなじ世ながら思をぐし
給けるなんげにおやの志かるもしぐるなれことにこ
そ侍れと、つゝう根めしくしひ侍りかくもうなき身
まていまことにいとひをてゐふもことりなれどおな
ぢくハかちらぬさ面なるましかバと口おしくなん、さ
れどこゝ一すぢにあるさ人とのミ志侍しをかくて

志のほかに二こゝびこいめらしぬり恨ましよろづけも
何かいとなぐさゝ侍りなどか紀くどさ申へだ、げに
いかばかりかとおまぶ志もなさまて、大(尾末詞)かるのうち
ちもやぶて後も、おけられ物をなんおぼしむを
ばれて、たれまなくなやゝ口うり給つゝ面く
のゐふことをてもこゝぐれをぢ低ほの光かし
給しかば、いうじうあるまじきことにおしゝ
きゝえてをぐし侍しを志るべきことなりや
もれしまひけん、こゝそまつりそめしこゝるも
あれば、れいのりうりもゝとさしもけをまさひ
こち侍しいゐでに、身げからも志のびてそぐ

のしきこえしかども、もれうげにおぼしこ
ましかば、うしろめたなかりしとぐめなさ男し
さく、まうでたべるおほしもたちかしなりし
なるがしのあざり山よりありけるになくくの給ハ
せかれば、ほうしといふなるにもおさましうさす
くなる人にてこそ入るそまつりけるなんかへしく
こゝそまつりしあへなきは、さらにこうちもまど
ひぜんなるなく詩しにましてさこそいとかなしう
をしたりこさこゆるかれこゞ田きこし給人(慧)もいうじ
うあさりこれ此ひなめりとこゝそまつり詩る
りもお紙この此あるさ夜そくちおしくこそ

などおほくいひかたしぬふうこんハこのひまり
ちくさしよりつゝさてもいかなりしことにか
などさこゆれバ(浮ん)ゆれながらうつくとも御ぼしぞ
いうじくうかりけるとてこゝぞうちなきぬへ分
りしさいとあたれなりさ(左を)ぐすぎこゝまくさ人
ぶるかうさ夜に成ぬれバこゝなくワやぐ抱なめりを
ましてこゝぶおさなきちごの心ちしておしかに心ぐ
引しきるさへそひてさゞりこちこゝりし此ぐ
しのうじかくそがれこれバ、めへもすぎていくことも
なくかさなりこゝ程すそのそぎめの中こいと先
でこゝさにも、文かさくしさ(討)ハなどかくハ成給にけむ

えたてまつりし世にかげりさ夜ぐうとましきれ心
づひ覚しかけんとはゆめまぐるにしきこえやはせし。
さきもあさましく思ひぐさせ給しれ心かれ。うこん
もおさなくより又なくこれこそてしさきていかな
かれまもをられてまつらじとしぬへしかひなく。
そしさぐまかすめこそてさせ給はざりしつらさ
なぐさこそて。はこさせずなさぬるりかれ白やのれ
ことも左をかたり出ていうじう人めこぐらしさまでお
ぼしなげくめりしに。程ふれバれいのれすさごと
どもこさこてぬふさへこそあれに侍れ。かの葉のこ
としへなくのどかにぬりこさやうにこし給しかどもす

すなくよなく衰におぼしへつ。うこんなどまで
群のかずまへぬふもそれれゆりとおぼしこめる
こそかたじけなくこそてまつり侍。のどやかなる
おりなくちらくめしこきてづきをぬれことのみん
の給出つ。おはをし世にはおぼつかなりもれにこそ
覚しけめども。人はかく心なぐやはあり。いつとても
心のいろはおなじことなれど大かたこ面まじき方
のろせはこよなくあさ紀かたにのこなん人めには
こしけり。今はいとかひなしやこれかことくちんづ
こへこそこゆりまぼろしもあらばざりとも衰とはお
ぼしなんしなどかたりを給おりく侍りにもげに

こそあはれにこゝろそまつり侍ぬれなどかゝりき
とゆれば（ほん）あはれにもたづしうもさ夜ぐかさこゝぶ
里さつぐけうつし心のいろこさはさしそとこゝ
給にお紙あやしやめれまへの衣にあらされこそ
まつりてずうしもなびきなん心がろさのこゝぞいハ
んかゝなくうかりけるよしやそも此世ひとつの
むらひなるじ人をばなまかうしとさきてしん身
のあはくさすらふべき契にてこそざるこゝぶれ
もありけめとさにはこゝぐのがれがたき身のうさ
ぞ世くのむらひもうちおしくさしられ給けり
さてもひろすゝ世にあるさ抱とさひまてなん。ふる

の人にあひむかひて又立かへりその世のありさ夜
きゝぬるハ夢がたりなどの心ちしてめづらかにもあハ
れにもいかばかばしざらんながらふる限りハさすがかく
誰にもやうくあひこゝを今ハと故し夕（ゆべ）まで心ぐ
ゝしうさをさしめれとも心にこゝへずなくなりなん
余のほどあはれにかなしくぞ覚しけるまらう
ともこゝかひハとまりぬればあまぎ君のゝより。ゆへ
あるひまりごやうの抱こゝやこにハめなれぬらぶ抱
などおしこさ夜にさりなしてこゝなるにこそま
つりぬへりうちもまどろまずつきをぬもれがたり
にながき夜もなになるぞあけぬれば。かへりなん

とうこうまあらずこゝあふ君の程ちるけさをおか
じらは侍ぞおぼつかなかるぬ所へいでつゝし侍
らん音りの時ぐうくろへぬへりしおやしのやどは
おぼしぬかや所ハいとひろく侍れバさりぬべきさ海
まつくろりをなしてつゝしきそくんと堪ひ侍
を大将殿のいうじう悪ぶべくのぬへバそれもいかゞ
とちぐうられちべるもなどかへの志るべきさ悪て
こそハと心ぬかりなどなくくさこも（浮心）あるまじ
のことやといさく語ながらこゝぐうちなきぬて（詞）い
ぶき紀ハげに中くなるべかれどもかゝ事さましこ
ゐ人ハ口ぎとぐまゝ人ぬべき山のおくをも望

出て人め志げきすまひハうこそあらんといひまぎら
りしてうちそむきぬへるうこちしめいひ志しぎ
おりしげなる紙（浮母心）いとゞしくかなしと心へり（詞）こやこ
とてもなまかされこ人め志けう侍しん。とさら
山里びて汚くしせ侍べきなど此心まつくさ海に
きこしなすも衣なりさ海ぐなるこぬおやなど
ゆるせこりけるとりいでし（浮）姫君の此まうハさら
まもいまず尾君まも所をきまでなりこれぞ
又なき男まよろこびさはぎて抱さびしき尾
君どもなどめさめこゝろ心ちなん志けるうこんもや
がて立とまゝまほしくせひこれども（浮詞）かちかり

心ぼそきすまねにふへこもりていいかなしてもぐさんいとあかまじきことのなひて
あらぬ世とおもひなしつる山のおくになすにぶねきて袖ぬらすらんとのなへだ
立(左)へるなごりぶかくなりしきなにあかぶきられとおもいましかばとおもひていとじうせんり
名をがらこうそのあらりの山さへかすかにとをうなりまくにいとぶ心ぼそくて(小重)こゝろは文なごりなしくてながめなふまぎらりしに(浮地)君ハ例のごやのをこなひに心入なべしうらんいそれられに(蒸)屐へまいりられがれいよりも人ずくなましめやか

まてたしつるにすまきよりてふえふきすきひつおりします程なりけるごぐちと(左)無て拍いふけたひを(蒸)きくつけなてとりつきめし出ていかにおどとひなへば(左)ありつる(さ)面あさうしぞきてなしてかれなにふぶねきてとの給ひる口ずきこもうり罪ゆれば(蒸)げにさぞせらんとあられまてうち泪ぐまれ給中くうちくぬさ面ならばかぢりもおぼしぞやあらん今ハいとあれに心ぐるしきうくそひて此心にかくらぬおりなりかり(白)家もうちうちにおりごとにさぐりなる人もありがくかめるをとく見し出ることハくれぬそのすぢぐりのことハ

なくてもなし。かんぢやうあらかれ給し。宮の君は
も程なくかくしひよりなて。例のしぢしは常やうに
常しらりしかど。今はさしもあらぬまや。毎いの中方
をば。猶つきをずあたれなることに常しられば。
世人も心にくらべし。大将君の中心しらひもおす紙
こえまなくむかしにかりり給ひぬを。おりがたくれ
ばしきれかり。ワ宮のおよすけ給まゝりしい
こじくうつくしうおはしますけ給まゝなんぞ
に猶なべてにはしきこえぬべうもおはしまさぬを。
程ふれどかかにはいうらぐひなほをいうじうお
ばしられば。引来れもしげなり。今上中宮いの宮

などゆゑしがらせぬへど。猶宮の中抱きぢ見かく
しうてまいらせたてまつり給ひぬなるべし。まこと
や大将君は左になりなて。内大臣かけぬへれど。い
とぶひかりそひたる心ちするに。通りしころより。
宮れいなるずなやましうし給しを。中めれとこ
ちなどこえてまつりしるるありて。男君にかく
とこえてかれば。さうぐしかりつるにすうしいう
れしと常しかり。女君などもこえさしにもいかず。
おばしよろこびて。中いのりどもなにかといまよ
まこちたし。せのにはこぶつきをぬながめにて。冬に
もなりにかり。こやこぶにゆきあられがちなれど。

ましていとゞしくかきくれげぬが上に又ふりそひ
つゝいくへか下にはうづもるゝこゝねのうちひぢをなが
めいでゝうち夕菅ふしのゐなるねど雪のうへより
かゝりいとかすかなるなびく紙これやさいをとゝに
きくこし山べのすゝやくなるんと心ぼそきもい
もんかゝなし

（浮）しむ人の宿をばうづむ雪のうちにかゝるぞ
ゝゝぬをのゝすゝぎ風例のうきくしつねよりも
日かずふるころはいとゞつまぎろ山べの詠さへ
こえもてゝろにまりなくまけいるれつるひの
くりのをともめづらしくて人ぞもしつゝに

いでゝころ（久有）ふやこゝぶにさへくらしてころのかし
きるはいかにとせやまきてしてなん

（蕉）いかぢうりながめもぶんかきくらし雪ふるころ
のをのゝ山べげにふりもへゐるおりふしも（浮）衰にせひ
しらるれがすゝし心とゞめて

（浮）とふにこそ詠をばこつれ白雪のふり埋（うづ）こゝろ畳
の通（がよひぢ）路うちせひけるまゝなる紙いと（蕉）衰と泪ぐまれ
て打をきがゝくこゝねゐへりさてもこれをいかにもて
なき風し心づからのことゝいひながらせ思なくて
過にしなぐさめにもいまゞにさうかゝにてあらを
まれしさ紙人しげきすまひいかれ（浮）もせよしぶめ

しとゝ出かへり母君の許しもよろこびに出いでゝ
ぬゝとなくて、おま君のかくまでとゞひさこゝ
れども、まめやかなる月のくまにはとけ
のこちびきかへるなりけりと出悦びのふかくてたかさ
下づゝひねども、いはれけるのほどくといひ出て。まめ
まで入なすやかやとさけりの、どやかなりタつかさ。
たね君は、姫君の家にまいりかくれども、やいかに
いまなん、六条院にいつきかしまへ給ふとおもひしも。
ふいのいれかんまいりかへれば、人の心かくこき程に
うちそよめきて流されさし出られば、けこそその
内のあいげに、いつかもなかれにけりこりやこし

月のかりにいとこそかなれとうちなげきさ給
へりをかくおんとこもゆかぬべし中将が声にて。
うろたへぬ人のあやまちは、おぼしめしとがめ
ざりけるまじき、されどかりもれとのいおまへそ
しわたしまほちうてそとそでまやのこすおろして入
なりけりしもしかなりつられいましめもごとも
あまいおすず。やがてくゆりぬかるとぞもうちうち
ワらひのへつうつさをすなる夜かりしどけなりありて。女
家いざり出かふたりさかれば、おもあとりかて。ぶぐ
いましも出させ給にけり。口をしうおもかへなずらぬる
とや。おなくしさ人のいふなるうざりの

えんもこゝ雨もしらまほしく侍りつるかれ中こ
おり焼(えん)しくなどきこしぬへる。げ(中訶)まとぢめもて
ぬるのこりなきも心ばそうとぢりほのかりま
ぎらりしぬへる。(蒸)さる雨ほしうおしげなり。(訶)力ま
つもる抱のもてをしらずがなまぜくりむかふと
いそぐなるひこそもられれとて志めやかまより
ぬぬつゝれいのむかし今の此抱(紙)こまやかまこさこ
えぬふまもかれをのくすまねハ私もしし給ハず。
さるハともまこさこてあはぬべき人のうへなる紙。
かけてもいひ出ぢハ後まこさしぬてぺぐそりと
おぼさんくるしかれどもなくなりまし程のあり

さ雨のおやしきもなれづらくれなりかめと
しらぬぞがなまもてなしぬへる。紙も又きこしまく
きことまじまるまゝる心ちしてまほなしでうさ
ふしまかくこそをかれとこさこて出んもうつゝを
くなさ心ちすべしうちさ給ハん人志なれ
めまさべきことのさ雨まもあらはばかるもしこさ
こゝそめてハのこりなうこそなるめ志のぶるよし
まこさこしるゝとれかりまもあふなさかるも
なけれど文のれあるりまて紙とさぶかるいひ
出んことをもしをのづら抱のかれなくてほの
こゝ人もあらばなど口をもさこうちまゝ屋もさ

よーゑの根のあ紙とけぬあるべし